

人形三人遣ひの源流

一

今日吾々が観る人形淨るりの人形といへば、三人遣ひである。一個の人形を、三人がゝりて遣つてゐる事、文樂座の操りに觀るが如くである。即ち主遣ひオモヅカ、左手遣ひ、足遣ひの三人である。「主遣ひ」は、人形の主體を遣つてゐる、その人形の責任者で、左手を人形の背後、腰部から、人形の胴内へ差込んで、頭の下部カシラに位する胴串ドムシを握り、同じく左手、二の腕への關節の處で、人形の胴輪ドムツを支へ、人形を支持して、右手では人形の右手を遣つてゐる。「主遣ひ」を側面から見ると寫眞に示すが如し。

ところで、この人形三人遣ひが、操發生當時からの遣ひ方かといふに、決して然らず。元來人形の發生は、傀儡子の人形から來た事は疑ふべくもない。併しどういふ形式で傀儡子の人形が、新興の「淨るり」といふ藝術と結合したかは、未だ知られてゐない。これは今後の研究に俟たねばならぬが、むつかしい問題である。吾々がハッキリと、遣ひ方を知る事の出來たのは、元祿三年七月刊行の「人倫訓蒙圖彙」卷七にある山本土佐掾、即ち角太夫芝居の樂屋内部の圖に示す所謂差込、又は突込と呼ばれる、

《人形三人遣ひの源流》

現在の三人遣ひにおける主遣ひの側面



突込み遣の人形に足の付いた處
加賀掾正本「愛染明王影向
松」所載

下より、^{い、い、い、}両手をさし込み人形一つを一人して遣ひ、手すりの上へ首を出さず力一杯差上げ短き淨りながら丸一段出遣ひのやうにして遣ひぬ中々見るもしんどく又なるべきとも見えず中にも辰松は其妙なる所を得て諸人専ら用ゆる所也(『倒冠雜誌』)

とある後の名人辰松八郎兵衛などの繪畫にも知らるゝ「差込遣ひ」である。この差込遣ひは、右引用の『倒冠雜誌』乃至『南水漫遊』その他の文證、または、右の『人倫訓蒙圖彙』七卷、「操における人形の研究」の挿畫參照、『聲曲類纂』一卷下、『牟藝古雅志』下などの所載畫證によつて、人々の眼に親炙するところ、茲に説明を要しないであらう。が、問題はこゝにある。往古、人形淨るりの初期に「諸人専ら用ゆる所」であつた突込遣ひが、どうして今日の三人がかりの人形形式となつたか、そしてそれは何時頃から三人遣ひが始つたか、差込遣ひから、三人遣ひへはどうして變遷したか? 今日まで、この人形淨るりの重大問題を、何人も解きほぐしてゐない。私は人形操りの研究は、まづこの遣ひ方の變遷を究めずして「人形淨るり史」が構成さるべくもないと思つた。この變遷——「人形三人遣ひの源流」が闡明されて、始めて、人形淨るり史の脊柱が、成立するものだと言つていゝと斷言する。この源流を究めない人形淨るりの研究は、鐵筋を忘れた鐵筋コンクリートの大廈高樓だといつていゝ。

二

ところで、三人遣ひについて、從來知られてゐる事實は、どんなものであるか？——といふに
享保十九年十月十五日初日の竹本座における「蘆屋道満大内鑑」初演の時で、

「人形遣ひはなはだ上手となり、與勘平彌勘平の人形は足、左を外人につかはせ、人形の腹働くやうに
拵始めし也、之を操り三人懸の始と云ふ。」(『諸事聞書往來』上卷)

「今度與勘平より人形の腹ふくるゝ様に仕初る。」(寶曆七年刊『外題年鑑』)

とある。この數行の文證以外には、何事も知られてゐない。元來差込遣は、人形の裾より兩手を
突込んで遣つてゐるのであるから、「足、左を外人につかはせ」といふ『諸事聞書往來』の記事が
生るゝ以前に、人形に足が付いた時がなくてはならぬ。人形の足は、いつから付いたか？ とい
ふと、

「人形は首計にて着物を打着せ、手も足も遣ひ人の手にて仕たる事にて、近世まで子供の疵びに、デク
のボウといへる物はなり、當代の如き木偶を用ゆるその權輿は、大阪の細工人石井飛驒といえるもの、
おとなの手を人形の袖へさし込み遣ふ事、甚見苦敷とて工夫なし、人形に手を拵へ付たり、夫よりはに

ならひて足を付、或は手の指を働かし、眼を遣ひ眉を働かすなど、近世さまざま自由を作る、是石井氏の工夫なれば、あやつり芝居にて尊み申さねばならぬ人なり、外題年鑑に云、松本治太夫座にて、源氏烏帽子折といふあやつりに藤九郎盛長、澁谷金丸二つの人形に初めて足を付たり、其後宇治加賀掾のあやつりにて、世繼會我のとき朝比奈の人形に足を付、夫より諸流共に立者の人形計りに足を付る事は成りぬ。〔南水漫遊拾遺〕三卷〕

とあるが、年代がハッキリしない。が、石井飛騨掾といひ、治太夫の「源氏烏帽子折」といひ、加賀掾の「世繼會我」といふのだから、人形に足の付いたのは、天和、貞享、——元祿とは降るまい年代である。

【註】石井飛騨掾と山本飛騨掾とは、同人であるといふ明確な證左は、私は得てゐない。が、山本飛騨掾乃至その後が、或時代に「石井」を名乗つたらしく、別人として何としても考へられないのと、『嬉遊笑覽』にも説明はないが、石井、山本兩飛騨掾を同一人らしく取扱つてゐるから、山本飛騨掾（彌三五郎）は石井飛騨掾だとして話を進めてゆく。

されば、差込遣ひを、下——即ち裾から兩手を突込んだ人形遣ひ方の一形式だとすると、人形に足が付いたらば、どういふ風に足が付いたのだらうか。これには恰ものいゝ畫證がある。加賀掾の正本「愛染明王影向松」の表紙裏の宇治太郎左衛門の出遣ひを見るといゝ。この「愛染明王」

は、元祿末か寶永初年の上演正本だといふ事であるが、これを見ると差込遣に足の付いた人形として、一行の説明をも要すまい。挿入の寫眞に就いて見られたい。(水谷不倒氏著『繪入淨るり史』中巻所載)が、これは突込人形に足の付いた特例である事、次稿の『操における人形の研究』を参照されたい。

これで、差込遣ひの足の付きやうは判つたが、この人形遣ひ方の形式から、どういふ過程をとつて、享保十九年の與勘平の三人がゝりとなつたらうか。疑問はこゝにある。そしてこの三人がかりへの遣ひ方の形式を考ふるには、人形に足を付けた初めての人だといふ、山本飛驒掾について知らねばならぬ。恐らく飛驒が、三人遣ひの源流を爲してはるまいか、『南水漫遊』の著者が「操り芝居にて尊み申さねばならぬ人」だと飛驒に就いていつてゐるが、私も飛驒を究めずして人形操りの歴史は分るまいとまで考へた。三人遣の源流を知る鍵は、飛驒の懐ろにある筈だ。これが私の研究の目安で、こゝに人形淨るり史の脊柱を見出さねば措かぬ。

三

ところが、山本飛驒掾に就いては知る處が少い。手妻(或は手祿^{テヅメ})太夫山本飛驒掾源清賢と呼

ばれ機巧人形派の一人で、「小刀一本」で「形ある物を作りて是を働かしむ、別けて水學の術」(業
大門屋敷)を應用する細工にかけては「無双の名人」と唄はれ、山本彌三五郎が本名で、元禄十
三年「細工人」として飛驒掾を受領し、翌十四年再び河内掾を受領した。が、寶永頃に京都の宇
治河内といふ淨るり操芝居の名代を持つてゐるから、河内掾は恐らく操名代の受領名ではあるま
いかと思ふ。ところで、飛驒は、「手妻太夫」として舞臺にも立ち、機巧の口上を述べてゐること
は、「勝尾寺開帳」といふ飛驒掾作の淨るり正本の表紙見返へしの、社衾姿で「山本ひだの掾口
上」といふ繪によつても明かである。(水谷氏著『繪入淨るり史』中卷参照)

また近松の「心中重井筒」に「包む裾の飛驒掾ふたつ遣ひの手づまにも、斯るなりふりうつす
とも」とあるから、飛驒掾の人形は、從來知られた「差込遣ひ」とは、異つた遣ひ方——即ち「ふ
たつ遣ひの手妻」といふが注目さるゝ一句で、下から、兩手を突込んで、兩手で、一つの人形を働か
す形式ではない事だけは明かであるが、さて飛驒掾の人形の遣ひ方は、どうあつたか、今日まで
知られてゐない。

【註】飛驒掾が受領したのは、細工人として、或は、重ねての受領は操名代としてある事を、強調し
て私が述ぶるのは人形遣ひとしては古往今來我が人形淨るり史上、唯一の受領者も、ないといふ事が私

の持論で、今日傳へらるゝ人形遣ひの受領者は（例へば引田淡路掾を始め）盡く、所傳の誤りか、乃至は座本としての受領だと斷言する。淨りり太夫の受領は勿論ある、人形遣ひの受領がないと私は言ふのである）近い例が（これは太夫だが）二代越路太夫が、「攝津大掾」といふ名を、小松宮殿下から賜つてゐるが、これは「受領」でない事明かである。人形遣ひ受領名の如きは、この類もある。この人形遣ひに受領のない事は、人形遣の業態上の祖先である傀儡子の社會的の身分に根ざしてゐる。されば人形芝居の大成者である吉田派の始祖初代吉田文三郎が、彼の一生を通じて四度觀方によつては五度、竹本座に對して反逆を企て、獨立、別座の經營を計畫したのは經濟的慾望や藝の上の自由を望んだのでもなく、一つに「座本」として受領を熱望した結果だと私は解釋する。竹本座にあつて、一人形遣の座頭といふだけで、座本竹田近江を凌いだ彼の權勢があつたにも拘らず、五度も、執拗にも獨立を企てゝゐるのは、「受領」に目安を置いたとしか思はれない。これは餘談だが、「飛驒」と「河内」の重ねての受領について、これだけを併記しておく。機會があらば、人形遣の受領は盡く誤りである事、引いては音曲に關係の深い彼の逢坂の蟬丸といふ疑問の人物は傀儡族の頭目株であつたらうといふ事を詳述したい。

【註】 人形三人遣を享保十九年の竹本座を始めだといふ通説を述べた。が、例の古山師重畫の『役者繪盡し』中の結城孫四郎の説經節人形に、三人遣ひらしい畫證を觀る事は、どうあらう。この書の刊行は元祿八年以前ならんといふ推定である。——といふ事もあるが、私が次に述べる「三人遣ひの源流」

を一考すると、さして不思議でもない。孫四郎芝居に、三人遣ひの先驅があつたとしても、中絶した先行の一形式だつたらうと考へらるゝ。——孫四郎芝居のは一まづ疑問として次へ讀續けて下さい。

四

即ち山本飛騨掾の遣つた人形の形式が、こゝで明になると、三人遣ひへの源流がハッキリするのだ。——と、この索線を獲得しようと、私は、實は必死の努力を盡したのだが、徒勞に終つた。殆んど絶望した時（昭和五年十月末）他に知りたい事があつて、家藏の役者評判記の古い所を調べてみると、左の一項の記事に出くはした。私は實に躍り上つた。その夜が、仄々と明わたつたのも私は全く知らなかつたほどだつた。その古評判記にはかうある。——

中之上 山下佐五右衛門

此人は去冬都へ登りし、出羽が芝居にて、山本飛騨掾遣はれし、片手人形共たとへられませふか、それをいかにといふに、此度のお役、ちよつと見た所か、片手人形のごとく、うごきそふな物でござらぬ所を、太夫本の引廻しの手をうしろより入て遣はるゝ故か、一兩年めつきりと所作ぶり、御狂言に成ましてござる、殊に此度初狂言に、……是と申すも山下殿の引廻し、とかく遣ての有片手人形、行末たの

もし。

とある。それほどの役者ぢやないが、座本の引廻はしがよろしきを得て新狂言にも、舞臺がよいといふだけの評言だが、茲に注意を要する事は「太夫本の引廻はしの手」(人形遣の手)が、「うしろより入て遣はるゝ」とある。「うしろ」は「背後」の意味である。「下から兩手」を突込む差込遣ひとは、明かに違ふ。「下から」は「裾から」を意味してゐる。「兩手」を突込む差込遣ひとは違つて、「山本飛驒掾遣はれし片手人形」とある。明かに差込遣ひと違ふ人形の他の遣ひ方が、茲に儼存してゐる事が判る。

そしてこの評判記は、首尾落丁の零本で開板年月、題簽を缺いた逸名の評判記だが、京之部でこの山下佐五右衛門の條りに「今度新嫁鏡に、はやみ甚之丞と成」云々とあり、又「是と申すも山下殿(ゑびすや座、座本山下半左衛門をいふ)引廻はし」のとあり、澤村長十郎の條りには、「此度新嫁鏡に、山形織部の介」云々とあるのを見て、この逸名評判記は元祿十四年三月の刊行と私は推定する。即ち山本飛驒掾が元祿十三年に受領してその年冬、京へ登つたものである。この當時の飛驒の人形は、手妻人形と言はずして「片手人形」と呼ばれた事は、この古評判記に明かであると共に、前掲の「二つづかひの手づまにも」と「重井筒」に言ふ「二つ遣ひ」——兩手

に一個づゝ遣ふ——片手人形なる事は首肯される。

これによつて按ふと、飛驒掾は初め「手妻人形」即ち機巧人形派に屬する細工人の一人であつて、「手妻太夫」と呼ばれてゐたが、自ら起つて、舞臺に人形を遣ふに至つては、機巧の人形から案出された「片手人形」といふ一つの形式で遣つてゐたものらしい。そしてそれは所謂差込遣ひとは全然異つた遣ひ方であつたと解釋していゝ。

即ち、辰松八郎兵衛を差込遣ひの代表と見ると、元祿十六年初演の「會根崎心中」観音巡り道行のおはつの人形は差込遣ひであつて、しかも足がない、兩手を裾(即ち下)より差込んでゐる。

〔牟藝古雅志〕

一方、山本飛驒掾を片手人形の代表と見ると、前掲元祿十三年冬の、その人形は、片手、後、ろより差込み引廻はしてゐる。また前掲の近松の「重井筒」は寶永四年の初演であるから、山本飛驒掾の片手人形は、元祿末(?)には、突込遣ひと併存して、人形操界に二つの遣ひ方が、並び行はれてゐた事が、これによつて明かに知られる。

五

ところで貞享元年竹本義太夫が、大阪道頓堀に操芝居の櫓を揚げた當初から、この義太夫の竹本座の人形遣の頭取、座頭を勤めてゐたのが、吉田三郎兵衛で、をやま人形の辰松八郎兵衛に對して、立役の人形を遣つてゐた。この三郎兵衛の人形が差込遣ひであつたか、片手人形であつたか、何の記録もなく、畫證も見付らないから、俄かに斷言は出来ないが、『倒冠雜誌』の記す處によると、

「吉田三郎兵衛は立役人形を専らにして元祖山本飛騨掾に近寄人形の奥儀を極め其頃より大立者、天満やおはつのおやま人形辰松八郎兵衛相勤むれば徳兵衛は吉田三郎兵衛、最初の國性爺も此三郎兵衛役に世に秀たる人形……

とあるから、三郎兵衛を、山本飛騨掾の系統の人と見て、まづ誤りはなからうと思ふ。そして三郎兵衛の一子八之助、後の初代吉田文三郎の初舞臺を、この同じ『倒冠雜誌』には、かう記してゐる。

「國性爺後日合戦に錦しやの出づかひ片手にてのはれわざ年若けれ共、さすが親三郎兵衛の子程有のちのちは天晴の役者にもなるべしと人々是をほめけるが……

とある。乃ち知る。文三郎の初舞臺の「片手にての晴業」を親三郎兵衛を通して飛騨系統の「片

手人形」だと解釋しても、さう無理でもあるまいではないか。即ち飛驒の片手人形が、三郎兵衛に傳はり、更らにその子文三郎の享保二年の初舞臺に、「片手にてのはれわざ」で好評を博したのである。そして文三郎その他のこの時代の人形遣の工夫によつて、人形の機械的の進歩は著しいものがあつて、その享保の十九年に、三人掛りが始めて工夫されたといふ順序である。

乃ち、三人掛りが始て演出される前の、差込遣ひと、片手人形との二形式を比較するに、何れの系統から三人がゝりが生るゝかといふ事は、その遣ひ方を一見してすぐ明かなる如く、兩手を裾から差込んでゐる差込遣ひよりは、背後から片手を差込んでゐる片手人形から發達變遷したらう事は、自然の順序であらう。「與勘平彌勘平の人形は、足、左を外人に遣はせ」と『諸事聞書往來』に言へるは、後世の主遣ひが、左手で人形を支へ、右手で人形右手を遣つてゐるのに近いものであると想像するに難くはない。唯一歩前の形式である。山本飛驒掾の「片手人形」が、かういふ片手形式であつたか否かは、俄かに斷言は出来ないが、「足、左を外人に遣はせ」と『諸事聞書往來』の筆者のいふ與勘平人形の直前の片手人形は、明らかに今日の主遣ひの形式であつた事が窺はれる。即ち言葉を換へると、飛驒の片手人形を源流として案出された遣ひ方の一つの形式が、今日いふ三人遣ひなのである。

六

今一つ傍證として、二つの畫證を、私は提出しよう。

その一つは、三人遣ひ發生以前、の享保十一年四月八日初日、豊竹座の當り狂言『北條時頼記』は、出語出遣であつた。そしてその舞臺面が『今昔操年代記』下卷に出てゐる。これによつて觀ると、近本九八郎の最明寺も、藤井小三郎、中村彦三郎の遣ふ人形も決して、謂ふ處の差込遣ではない。左遣ひと足遣ひとを缺いてゐるが、今日の三人遣の主遣ひの形式に酷似してゐる。

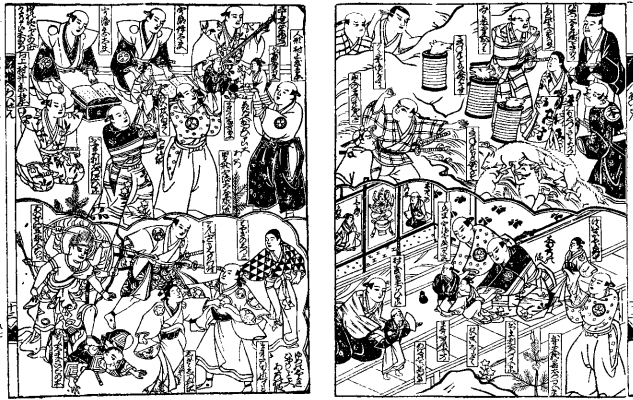
さして、今一つこの最明寺を遣つてゐる近本九八郎こそ、この時から七年の後、竹本座で與勘平の人形を遣つた人なのである。始めての三人がりの工夫をしたのが、この近本九八郎だといふから、この『時頼記』の挿畫は輕々には見遁すことは出来ない。今日まで、この手近の『操年代記』の挿畫は、何人にも見られてゐたが、『飛驒の片手人形』の形式が判らなかつたから、この挿畫に、特に三人がりの源流を見出す事が出来なかつたものだ、私は斷言する。

更らに飛驒の片手人形の形式を知つた眼で、從來と視角を換へて、もう一度水谷不倒氏著『繪入淨るり史』中卷所載の『愛染明王影向松』の挿畫をよく觀て戴きたい。この挿繪で見ると、左

《流源のひ遣人三形人》



面臺舞の（月四年一十保享）演初『記頼時條北』の座竹豊
載所（刊年二十保享）『記代年操昔今』



面臺舞の用混式様二のと形人手片と形人込突
載所『松向影玉明染愛』本正袈袢加

の上欄では、差込遣ひが描かれ、右の下欄には、變遷した片手人形と差込遣ひとが併用されてゐる。そしてこの「愛染明王」は元祿末か寶永初年の宇治加賀掾の正本である事を思ふと、そして「手づま宇治太郎左衛門遣ひ申候」とある繪中の説明を見れば、三人遣ひの源流が、この「手づま人形」——即ち「飛驒の片手人形」から發生されたものである事を、明々白々に、その變遷の徑路を看取する事が出来ると思ふ。

斯くて、享保年度に、人形の發達驚くべく、長足の進歩を遂げ、前述の如く享保十九年に、三人遣ひが完成されたのだが、その端は、山本飛驒掾——吉田三郎兵衛——吉田文三郎——近本九郎その他の手で大成されたのである。そして元文元年三月豊竹座の『和田合戦女舞鶴』で、從來の人形では、三人遣ひとしては、小さきに過ぎ、遣ふに不便であつたから、板額女を遣つた藤井小八郎は、普通の二倍大の板額人形を拵へた。そしてこの二倍大の人形が月日の經つに従うて全ての人形の、普通の大きとなつたものであるから、明和元年十月、豊竹座の『嬢景清八島日記』では、景清の人形を、また大きくした。されば、これを逆算してみると、元文元年の二倍大の板額の人形が、現在普通の人形の大きさで、元文元年以前の人形は、現在の約半分であつた事が想像されるのである。

一方、操りの大勢は、三人遣ひに翕然として奔つたから、辰松八郎兵衛は、江戸に下り、差込遣ひは、江戸の辰松座を最後として滅亡したものだらう。(別項『八百屋お七江戸紫』参照)そして三人遣ひへの發達が片手人形の源流から發生し、片手人形は、元祿に既にありとすれば、唯一歩の變遷である三人遣ひの創始形式が、江戸の結城孫三郎芝居にあつたとして、さして驚くがほどの事でもない。この意味において、萎微して發達は遂げなかつたが、三人遣ひの早い處は、或は江戸の説教節の人形であつたかも知れぬ。

(昭和、六、八、)